

健やかに長く働くために

がん社会 を診る

中川 恵一

50年前と比べて、平均寿命は男女とも12年ほど延びています。一方、年金の支給開始年齢は50年前すでに60歳でしたが、今も65歳への移行が完了していません。

このままでは、わが国の年金制度の破綻は目に見えていて、支給開始年齢の70歳への引き上げは避けられないと思います。私たちは70歳あるいはそれ以上まで働くことになりそうです。

経済協力開発機構（OECD

）が今年1月に公表した対日経済審査報告書でも、定年の廃止を提案しています。移民などの受け入れを抑えながら国家を維持してきたわが国では、欧米のような「ハッピーリタイアメント」は期待薄と言えるでしょう。

そして、がんは細胞の老化といえる病気ですから、働くがん患者が増えることは必然。皆さんは「がん社会」を生きていくことになります。

70歳くらいまで働き、その後も一定の生産性を保ちつつ社会とのつながりを維持するために、自分の体を大切にすることが必要です。

まずは、80歳までにがんで命を落とさないことが大事。65〜74歳の男性、35〜74歳の女性ではがんが死因の4割を超えます。「がんの壁」を越えることが必要です。

が、「健康増進法」という法律があります。国民の責務として「健康な生活習慣の重要性に対する関心と理解を深め、生涯にわたって、自らの健康状態を自覚するとともに、健康の増進に努めなければならない」と定めています。「自分の体に責任を持つ」とは日本人の努力義務になっているのです。

新入社員の皆さんには、がんに関するリテラシーを高めることが求められます。発症原因も分からなければ治療法も存在しない「難病」もたくさんありますが、がんは知識や行動で、ある程度「コントロール可能」な病気です。学校でのがん教育が始まっている今、大人のがん教育が大きな課題です。

手前味噌ですが、新入社員の皆さんには、このコラムを毎週お読みいただき、「がんリテラシー」を高めてもらいたいと思います。そして、人生100年を謳歌して下さい。（東京大学特任教授）

春爛漫（らんまん）。今回は新入社員の皆さんにメッセージを届けたいと思います。皆さんは65歳までは仕事をするつもりでいると思います。しかし、40年後は70歳あるいはそれ以上まで働くのが常識になっているかもしれない。

「人生100年時代」も今よりずっと現実的になっていくはず。何といても、年金の支給開始年齢が引き上げられるのは間違いないと思います。



イラスト 中村 久美